

一八六三年

(文久癸亥) 西川通船路新開図

此たび帝都四方の運送便利を(にしかわとおりふなじしんかいのず)

ひらきて万民を救助せんと深く

厚き思食により

大内より数千両の黄金を下し賜りて

西川の高瀬速に成功ありしは實

例なき御事ども花の都へ寶の入船

国々の米穀炭薪は更なり種々の

産物に世の賑ひを積みそへて其

めぐみをここに仰がんとあらましを

画きて廣くもろ人に

知らしむる事とはなりぬ

文久三年、京都において、桂川から取水して、下鳥羽から小さな川を利用して、二条城へ達する新たな水路が開発された。江戸時代初期に開発された高瀬川に比して、西高瀬川、もしくは西川と名付けられた。その風景を描く。木津・鴨・桂川の三流が合流して淀川になる八幡あたりまで描かれ、遠大な眺めである。

天津空

多可きめ具みを

徒ミうけて

右りの御京

舟ぎ本ひ世里

ふなぎお・う【船競ふ】 船をきそい合って漕ぐ。

櫂園

河喜多真彦 かわきた まひこ

国学者。通称真一郎、号は櫂園、作楽園、拳樹園。京都生。六人部是香門人で、国学・史学に精通した。明治維新の際、東征軍先鋒隊に加わるが、軍令に触れ桑名で死す。著書に『鑒定便覧』『近世三十六名家集』等がある。慶応4年(1868)歿、51才。